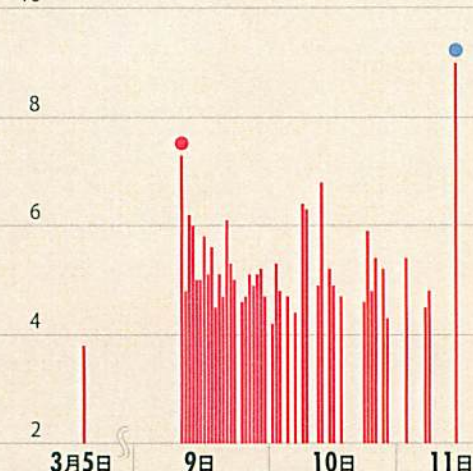


## 東日本大震災の予兆はあった

群発地震の震度(三陸沖)

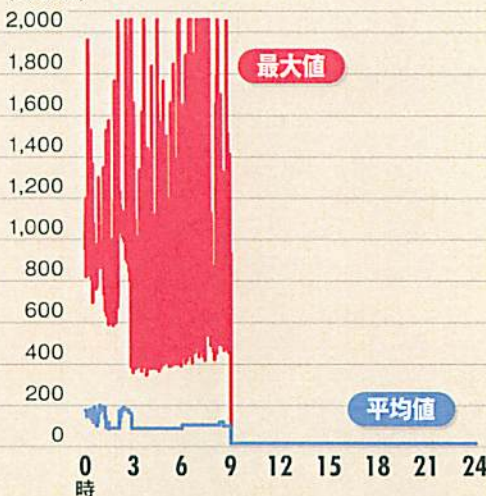
(マグニチュード)



出所: 気象庁(宮城県沖を含む震度1以上の地震)

FM電波の推移(3月7日)

(ミリボルト)



出所: 行徳地震前兆観測プロジェクト  
リアルタイムグラフ by SC

FLINT HILL

# 日本に安全な所は一つもない 自然災害リスクの正確な把握を

3月11日午後、東北の太平洋沖で巨大地震が発生した(左のグラフ)。2日前の9日に三陸沖で起こったM7・3の地震直後、権威筋は余震を予報したが、巨大地震への警戒を呼びかけなかった。

**大** 地震直前には異常電波がしばしば観測される。静岡県清水ではFM電波の異常データ観測が2カ月半継続した後、3月7日に収束していた(右のグラフ)。

この収束を見た東海アマチュア無線地震予知研究会は、収束後3〜4日程度で大地震発生という従来のパターンに照らし、3月10日ないし3月11日にM9クラスのスーパーストーン地震が東海地域などで発生すると3月9日午前9時時点でブログで予言していた。発生場所の予想はずしたものの、時期や大きさをピタリと当てたのだ。

2月中旬以降の三陸沖群発地震が尋常でないことは、3月11日の朝までにさまざまな表現でネット上で指摘されていた。この点でマスメディアはまったく無力だった。大地震に関する各種の前兆現象をどのように拾い上げ、整理して有用な予知につなげるのか。これは今後の大きな課題である。

(財)年金シニアプラン総合研究機構  
研究主幹・一橋大学特任教授

高山憲之

Noriyuki Takayama



「宮城県沖でM7・5前後の地震が99%の確率で今後30年以内に発生する」という程度の公式予測にとどまってもほしくない。

天災は忘れた頃にやってくるという(寺田寅彦氏の名言)。とかく人は忘れやすく、危険が感じられなくなると、身を守ることを大切さを失念してしまふ。

ただ、よく考えてみよう。日本列島全体が災害列島そのものだ。安全だといえる所は一つもない。程度の差こそあれ、地震・津波・台風・地盤沈下・地割れ・洪水・液状化・土砂崩れ・雪崩・雷等、危険はどこにも常にある。各人の居住地や勤務地の自然災害リスク(活断層・埋め立て地・造成地等の情報や過去の災害情報)は今、かなりのレベルまで判明している。

問題は、危険情報がどのように受け止められるかにある。危険があっても2〜3年は、まず大丈夫だ(発生確率はきわめて低い)といわれると、切迫感はなくなくなってしまふ。危険度が仮に高くても、そこに人がすでに住んでいる場合、公的規制発動は今もって困難だ。

過去の悲劇を二度と繰り返さないためには、人は、時に冷酷非情になる必要がある。